

哲学者・徳山工業高等専門学校准教授

小川 仁志さんに伺いました

OGAWA Hitoshi

聞き手

松田 曜子
編集委員

海田 辰将
編集委員

[writer] 駒崎 文男
[photo] 海田 辰将

商社マンから公務員へと転身、その後哲学を学び、今は高専で教鞭を執るユニークな経歴をもち、地元商店街で「哲学カフェ」を開くなど多彩な活動に取り組む小川仁志さんにお話を伺った。

2009年8月27日(木)
徳山工業高等専門学校 小川准教授研究室

哲学カフェはまちづくりの一環

——小川先生はJR徳山駅前の商店街で「哲学カフェ」を開くなど、哲学が身近に感じられるユニークな地域活動を進められています。そのきっかけは何だったのでしょうか。

小川——私は工業高等専門学校（以下、徳山高専）で哲学を教えています。哲学者になる前は、名古屋市役所でまちづくりの仕事を携わっていました。そうした経験から、哲学者として机にかじりついて研究をしているだけではなく、独自の活動をしたいと考えていました。

私の専門としているのは公共哲学で、一人ひとりの市民がいかに主体的にまちづくりを担っていかれるか、その方策を探っていくというものです。それを実践する場として「哲学カフェ」にい

き当たりました。商店街でやることによって、市民の方も参加しやすくなりますし、商店街の活性化にもつながります。私にとっては、哲学カフェはまちづくりの一環なのです。

実際に始めてみると、世代性別を問わず、毎回いろいろな人が参加してくれます。哲学カフェでは、音楽を流し、お茶を飲みながら、みんながお互いを「太郎」、「テリー」などとニックネームで呼び合います。ニックネームで呼び合うことで、肩書きを忘れ気楽に語り合える場をつくっています。私はそこで皆さんにも公共哲学を実践してもらいたいと思っています。たとえば、まちやインフラは普段それがないかということを想定することはありませんが、もしなくなったらどうなるのか、など一つの問題をどことん考え抜くことによつて、「頭の筋トレ」ができ、まちづくりへの関心も高まります。バラバラだった市民が一緒に考えることによつて共通の思いを認識し、強い市民になつてもらえたらと

願っているのです。

小中学校の義務教育に哲学を

——小川先生はなぜ高専の先生になられたのですか。

小川——哲学者のなかには大学でなければ嫌だという人もいますが、私は、哲学は誰がどこでやってもいいと思っていました。それは専門技術を学ぶ高専生でも同じです。また、私は、哲学は早いうちからやるべきだと思っていますので、高校生と同年齢の学生に教えられたいということも、高専の教員になつた動機になりました。

私としては、本当は哲学を義務教育の段階から導入し、小学生から教えてほしいと思っています。みんなまで本質について話し合い、「じゃあ、今日は自由について考えてみよう」というような授業があつてもいいと思うのです。

高専では、4年生に哲学を、専攻科1年に技

術者倫理を教えています。哲学ではものもの考え方を教えます。技術者として会社に入り、どのように人とコミュニケーションを取り、どのように物事を考え、仕事を進めていくか。そこには哲学のベースがあります。技術者倫理では教科書に沿った一般的なことのほかに、新聞に載っている事故などを題材に、かかわった企業の担当者や管理職、技術者、商品を使っていたユーザーやその家族、地域の人びとなど、それぞれの心にスポットを当てて問題を考えさせています。一般的な技術者倫理の授業では、題材となる事件・事故に関して技術者サイドからしか見ませんが、物事を多面的に見ることで、自分などの立場にもなりえるし、また自分が技術者に

なったときには、関係者みんなの気持ちが変わっていないといけないということがわかります。物事にかかわっているあらゆる人間を市民社会の仲間ととらえ、同胞への配慮の気持ちをもつ。そういったことを学んでほしいのです。

技術者は誠実さを大切にしてほしい

——哲学者の立場として、今後の土木業界について、また土木技術者に向けてのメッセージはありますか。

小川——世の中が市民社会化しているということは間違いありません。地方自治体なども市民とのパートナーシップや市民参画を呼びび

けています。実際、市民も力をつけてきています。そうしたなかで、土木事業者や技術者は、自分たちの仕事は、市民との共同行為なのだという認識を、まずもたないといけません。官に雇われた専門家だという上からの目線で事業を行うのではなく、常に市民社会を形成する同胞に配慮して物事を行っていくことが大切です。医者インフォームドコンセントと同じように、相手の立場でわかるように説明をするという説明責任も果たさなければなりません。また、利便性や環境などを考えるときも、あらゆる側面において同胞への配慮が必要になってくると思っています。

私は、市民社会の倫理は、誠実さだと思っています。それは私が専門にしているヘーゲルから学んだことです。ヘーゲルは市民社会論のなかで、市民社会を貫徹している倫理というのは、誠実さだと言っています。市民社会というのは、水平な社会で、人間関係が信用や信頼によって横方向につながれているものです。そういうところで物事を行うときには常に誠実さが求められます。誠実さというのは、一言で言えば、同胞への配慮です。なぜ市民社会で誠実さが求められるのか。それは市民社会が仲間の集まりだからです。そこでの態度というのは決して命令であつてはなりません。

個々の技術者はとにかく誠実さというものを、一番大切にして仕事をしてもらいたいし、技術者を育てる教育者もそうしたことを教えていけないといけないと思っています。



小川 仁志(おがわ・ひとし)さん プロフィール

1970年京都市生まれ。徳山工業高等専門学校准教授。商社マン、市役所職員などの経歴をもつ異色の哲学者。専門である公共哲学の実践として「哲学カフェ」も主催。著書に「市役所の小川さん、哲学者になる 転身力」、「哲学頭の仕事術」(ともに海竜社)がある。